

## 留学体験記

3年2組8番 大井穂乃香

私は、2021年の8月末から2022年の6月末まで、カナダのバンクーバーへ留学をしていた。この卒業論文では、約10か月間私が何を体験し、何を得てどう成長したのかに加え、私がなぜそもそも留学を志したかについて述べていく。

私は幼い頃から、多言語話者に憧れていた。というより、世界共用語でもなければ、他の国で使われていない言語(日本語)しか流暢に話せないことに、不安を抱いていたという方が的確かもしれない。しかし、ただ不安を抱くだけではあまりに保守的で軽率だったので、私は英語を学ぶことにした。世界に五万と存在する言語の中から、英語を第一に選択したのはたくさんの理由がある。その最大の理由は、英語を習得する事で身につく「英語脳」の利点を多く活用し、恩恵に浴したからだ。言語習得の分野では、文法や使われている文字等の点から、英語話者の方が比較的効率よく目標を達成することが出来ると広く知られている。近い将来、英語だけでなく多言語をツールとして用い自分のスキルを活かしながら、仕事をしたいと考えている私には英語習得は小さな第一歩に過ぎない。その小さな一歩を大きく支援してくれた両親には、感謝してもしきれない。私や兄達が幼い頃からあまり干渉せずに、私たちがやりたいことを尊重し育ててくれたおかげで今、自分が進もうとしている道に自信を持って努力出来ている。そんな両親を含め全面的に支援してくれる家族の思いと、お金を無駄にしないように今回の留学は絶対に成功させようと私は滞りなく準備した。中学生の頃に受けたEltisのスコアが当時まだ有効だったので試験らしい試験はTOEFL iBTだけだった。準備の中で最も重要なのは、紛れもなく「英語力の向上」だ。参考書や教科書からでは無く、代わりにYoutubeやNetflixなどのメディアで英語のコンテンツを観る。すると効率よく、「生きた英語」を身につけることが出来た。単語や熟語を覚えることも大切だが、私は「英語脳」を作ることに尽力した。私はこの準備期間に、言語習得の手軽さを強く感じた。というのも、現代のインターネット上には無料で言語を勉強できるサイトやコンテンツ等が多く存在し、そのどれもが、「言語の壁に阻まれても、まだ十分に伝わってくる、あの魅力の先にあるものを知りたい」と、さらに意欲的に成長させてくれたからだ。

準備万端と意気揚々に到着したカナダでの生活は、日本とは全く異なる社会であった。その中で自分の日本人としてのバックグラウンドを多く突きつけられた。友人との日常会話では、軽い話題から、慎重に言葉を選ぶ必要がある話題など、幅広く、安楽死について、同性愛者の権利について、飲酒年齢、ソフトドラッグの使用または販売についてまでも。良い意味でも悪い意味でも規制が厳しい社会で生きてきた今までの自分では、意識していなかった現実問題を多く認識すると同時に、自分の生まれ育った環境について、他者に説明する機会も日常に多くあった。個人的な質問から時には耳が痛い質問まで、彼らは好奇心旺盛であった。これらの出来事はいかに世界情勢から身の回りで起っている小さな出来事までに対して、常に自分なりの考え、関心を持ち、他者に伝えることが出来る様にまとめておく事が重要かを教えてくれた。

留学当初は、予想通り精神的にも肉体的にも滅入る事が多くあった。留学は時に、精神的健康を増幅させることもある。その反面、今まで悩んだことも無かった問題に直面する事もある。これには、多くの要因が挙げられる。それは、今まで生きて来た環境と現地の環境との間で生じるギャップから来ているのではないかと考える。日本の学校とは異なり、現地の学校では多くの情報を受動的に得られる訳ではない。情報は効率よく生きる為の必要条件だ。そのためには自から能動的に行動するということが必要である。それは現地の生徒達にとってはごく自然なことであった。日本の学校ほど明確に道標されていない環境で育った彼らと、私が感じた自己の力量の差は大きい。例えば、経営学のクラスでの話。このクラスでは基本的にディスカッションが多い。常に誰かとコミュニケーションを取っていないと、次の課題や、その評価の基準さえも分からないという状況に陥るクラスであった。当時の私は、生徒の積極性の向上を促進する良い方法を思い付いたものだな、と感心したのを覚えている。経営学という名前から判るように、このクラスで取り扱う内容は金融、マーケティング、株に始まり最後には(自分でビジネスプランを立て、可能であれば実行せよ)という高校生の守備範囲から遠く離れた課題まで出されていた。殆ど年上の生徒しか居なかったクラスの中で、唯一同じ学年の友人とタッグを組んだ。私達のビジネスプランはこうだ。仕事を探しているチューター達と高校の生徒達がお互いを効率よく見つける事が出来るようなウェブサイトを立て、間を取り持つ役目を果たすというもの。その際、第一の懸念である「生徒の安全性」の為、チューターに対してどの様な採用基準を設けるか。また、彼らの面接から認証まではどの企業に依頼するか、その際かかり得るコストを利益の無い状態から補うには、どのくらいの融資、助成金、補助金を借る必要があるのかなど、架空の企業ではなく実在するいくつかの企業を分析し、検討しながらプランを立てる必要があった。私たちが主とする収入源は、そのウェブサイトのアクセス料や実施したイベントから得ることになっている。

このプランは約三年後にやっと黒字に安定するように計算したので実行に移すことは無かった。結果としてこのプランは大きく評価され、満点を取る事が出来たのだ。先生からも「来学期からあなた達のプランを手本としてクラスで紹介したい」という旨の嬉しい総評を頂いた。一緒にタッグを組み、放課後も休日も課題を一緒に取り組んだ友人は、私と同学年ながらもマーケティングへの関心が高く、私にはハードルが高い様に感じられたこの課題も当たり前のようにこなし、私を引っ張ってくれた。私はその姿に感化され、同時に彼女から多くを学んだ。自分の進路に迷っていた当時、ふと気になって彼女に、将来の人生についてのプランはあるのか、と聞いてみた事がある。彼女は「どの職業に付きたいかはまだ分からない。でも、なんでもこなせるようなカッコいい大人になりたいよね。」と言った。細部まで、事細かに考えることに長けている彼女にしては、想像していたより大まかな答えが帰ってきたので意外だった。彼女が言うには、今夢見ている理想の人物像に「いつか変われる」と考えている人は死ぬまで変わることが出来ないらしい。いつの日か急に知識が増える訳でもない、ましてや1日で教養が身につく訳でもない。そんなことは百も承知だ。しかし、実際に行動に移すことの出来る力は何処から来ているのだろうか。彼女に聞くと「ただ興味のある分野に偶然需要があっただけで、仕事に生かせるかもしれないなんて私は幸運なだけ」と彼女は笑ったが、彼女の努力を知っている分、自分がどれだけ狭い視野の中で生きてきたのかと恥ずかしく思えた。

彼女やカナダで出会った他の友人と話していると、高校生、大学生という多少の失敗をしても取り戻すことが可能な時期に保守的で居ては、あまりにも人生がつまらなくなってしまうと実感した。一緒にタッグを組み、放課後も休日も課題を一緒に取り組んだ友人は、私と同学年ながらもマーケティングへの関心が高く、私にはハードルが高い様に感じられたこの課題も当たり前のようにこなし、私を引っ張ってくれた。私はその姿に感化され、彼女から多くを学んだ。彼女に、将来の人生についてのプランはあるのか、と聞いてみた事がある。彼女は「どの職業に付きたいかはまだ分からない。でも、なんでもこなせるようなカッコいい大人になりたいよね。」と言った。細部まで事細かに、考えることに長けている彼女にしては、想像していたより大まかな答えが帰ってきたので意外だった。彼女が言うには、今夢見ている理想の人物像に「いつか変われる」と考えている人は死ぬまで変わることが出来ないらしい。いつの日か急に知識が増える訳でもない、ましてや1日で教養が身につく訳でもない。そんなことは百も承知だ。しかし、実際に行動に移すことの出来る力は何処から来ているのだろうか。彼女に聞くと「ただ興味のある分野に偶然需要があっただけで、仕事に生かせるかもしれないなんて私は幸運なだけ」と彼女は笑ったが、彼女の努力を知っている分、自分がどれだけ狭い視野の中で生きてきたのかと恥ずかしく思えた。

彼女やカナダで出会った他の友人と話していると、高校生、大学生という多少の失敗をしても取り戻すことが可能な時期に保守的で居ては、あまりにも人生がつまらなくなってしまうと実感した。「現にあなたは一步踏み出している。その有り難みも理解しているならちゃんと自信を持って認めてみると良いよ。」私はいつも自分が選んだ道に自信を持って居た。何かと理由をつけて嫌なことから逃げる道を選んで来た。結果として彼女と同じ様に自分が得意な分野(英語)に需要があったので、周囲の人は私が「嫌なことを避けるため」が留学を決めた理由の一つであるなんて気づかなかった。それを良いことに、自分を正当化し続けていたことが、自信の無さの現れなのかも知れない。言動から伝わったのだろう。彼女の前でこんな話をした覚えは無いが彼女の言葉は私の視野を広げてくれた。

カナダの生徒と約10ヶ月間を共にして気付いたことは、彼らは日本の同世代の生徒よりずっと、社会変革や団結への意識が強いということ。意識だけでなく、実際に行動を起こす力の根源は、学校の授業スタイルに大きく関係しているのだ。そんなカナダの学校では、忘れられない出来事がたくさんあった。特に驚いた事といえば、学校の中庭の隅で大麻を栽培し、生徒内で売買されていた事だ。バンクーバーでは19歳を超えると、日本の法では違法とされている一定の薬物を、合法的に使用出来る例がある。彼らが19歳以下の生徒にも売り出していた事は事実だが、誰も彼らを咎めなかった。水蒸気タバコを学校の敷地内で吸っている生徒も多く見受けられた。私は仲の良い友人に「なぜ教師達や他の生徒は止めないのか、これが普通なのか」半ば混乱しながら聞いた。彼は「誰も止めないよ、止めたって彼らが改心する見込みは無いからね。それよりみんな面倒ごととは関わりたく無いんだと思う。」と答えた。薬物やアルコールがすぐ手の届くところにある中で、躊躇し、疑い、自分で何が正しいのか判断する力を身につけるには、十分すぎる環境だったとも言える。

「外国に住む」ということは、その国を愛するという事なのかも知れない。文化、言語、人々、景色、匂いを好きになること。留学とは単に「勉強」することではなく「学ぶ」ことが主にあるのでは無いだろうか。教科書を読む、講義を真面目に聞く等、知識を蓄えることが悪い訳では無い。しかし、実際には経験し、世界に飛び込む事が重要だと考える。沢山の選択肢がある中で親元を離れ、友達も居ない地に自らを移す事は容易では無い。それでも私は「留学は最終的なゴールではなく、自分を探索するプロセスの一部に過ぎない」という自論の根拠を固めるために、これからも挑戦し続けたい。

この10カ月間の中で、私はたくさんものを目にした。日本国内で取り組むことが可能な英語の勉強とは比べ物にならない程、素敵で、かけがえのない、忘れることなんて出来ない思い出。17歳という多感な時期に留学に挑戦したことで、色々な感情と葛藤し、悩み、自分自身について理解が深まった。私は他者と過ごすより、一人で過ごす方が楽だと感じていたが、この留学の経験から他者と関わり合うことで自分をより知ることが出来る、と改めて他者との関わり合いを大切に認識した。